

# 解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（12・上）

—— 李性好さんへのインタビュー記録 ——

藤永 壯／高 正子／伊地知紀子／鄭 雅英／皇甫佳英  
高村竜平／村上尚子／福本 拓／高 誠晩

A Survey of the Life Histories of Resident Koreans in Japan  
from Jeju Island in the Immediate Postwar Period (12) — Part I —  
— An Interview with Lee Sungho —

FUJINAGA Takeshi, KO Jeongja, IJICHI Noriko, CHUNG Ahyoung  
HWANGBO Kayoung, TAKAMURA Ryohei, MURAKAMI Naoko  
FUKUMOTO Taku, KOH Sungman

本稿は、在日の済州島出身者の方に、解放直後の生活体験を伺うインタビュー調査の第12回報告である。この調査の目的や方法などは、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（1・上）」『大阪産業大学論集 人文科学編』第102号（2000年10月）に掲載しているので、ご参照いただきたい。

今回の記録は、大阪市生野区在住の李性好さんのお話をまとめたものである。李性好さんは1920年、済州島旧右面大林里（現・済州特別自治道済州市翰林邑大林里）のお生まれである。

インタビューは2008年9月13日、大阪市生野区の高齢者専用マンションで、藤永壯・高正子・伊地知紀子・皇甫佳英・高村竜平・村上尚子・高誠晩の7名が聞き手となって実施し、2012年10月20、26日に伊地知と高誠晩が改めて訪問して内容を確認した。なお今回のインタビューはこれまでと趣を異にし、話者の李性好さんはほとんどすべてを朝鮮語で話された。作業は、テープ起こしを高誠晩が行い、翻訳された日本語原稿を伊地知らが編集したうえで、用語解説を高村が、参考地図の作成を福本が、最終チェックを藤永が担当して完成させた。

なお李性好さんの生涯については、すでに以下の文献が取り上げている。

成律子『オモニの海峡』彩流社、1994年

朴日粉「生涯現役 済州4・3事件を生き延びた 李性好さん」『朝鮮新報』2008年7

月11・14日（のち、朴日粉『いつもお天道さまが守ってくれた——在日ハルモニ・ハラボジの物語——』梨の木舎、2011年、に収録）

以下、本稿の凡例的事項を箇条書きにしておく。

- (1) 上述のように、今回のインタビュー記録はほぼすべてが朝鮮語からの翻訳である。翻訳文中、一般的な単語や地名などは漢字やカタカナで、また特殊な単語についてはハングルで表記し、煩雑を避けるため今回は初出のみ発音を日本語のルビで示した。また朝鮮語で話される中で日本語の単語が混じった場合は、翻訳文ではカタカナで表記し、[ ]で意味を補った。ただし、まとまった内容を日本語で話された部分については、斜体で表示し区別することにした。
- (2) 本文中、文脈からの推測が難しく誤解が発生しそうな場合や、補助的な解説が必要な場合は、[ ]で説明を挿入した。
- (3) とくに重要な歴史用語などには初出の際＊を付し、本文の終わりに解説を載せた。第4～11回報告で解説した用語については、丸数字で報告番号を、アラビア数字で注番号を記し、かっこでくくった（例：(④-＊13)は第4回報告の＊13をあらわす）。
- (4) インタビューの際に生じたインタビュー側の笑いや驚きなどの反応については、〈 〉で挿入した。
- (5) 話者が語った日本語・朝鮮語は、話者の発音どおりに表記することを基本としたため、いわゆる「標準語」とは異なる場合がある。

なお本稿は言うまでもなく、李性好さんの証言からとくに重要と思われる箇所を中心に抜粋、編集したものである。できるだけ客観性に配慮しつつ証言を再現しようと努めたが、編集の手が入っている以上、叙述に編者の主観が反映されている可能性は排除できない。本稿の内容に関する責任は全面的に編者にあることを、あらかじめおことわりしておく。

## 故郷・大林里の人びと

——この写真（図2）、どうやって持ってきたんですか？

李：うちの弟[李ビョンドン]が、私が日本に来ることになったから、「姉さんに」って送ってくれた。[写真（図2）を指して] 済州島で私が13歳の時、大人たちと一緒に。私が歌がうまいと、婦人親睦会に。

——どこにおられます？

李：[写真の自分を指して] 私の幼いころは、背が高くて。[後列一番右の人物を指して] この方は啓蒙運動を指導しようと、青年たちによくしてくれた<sup>シン</sup>申チャンヒ。それと中の





図2 大林里婦人会

後列の右から5番目、黒いチマ（スカート）の女性が李性好さん（当時14歳）。  
後列の一番右が申チャンヒ（最初の夫・申燦鎬の長兄）。

李：たくさんあります。

〔最初の夫となる<sup>シンチャンホ</sup>申燦鎬は〕<sup>ハンリム</sup>翰林面の戸籍責任者で、実によく殴られました。〔別の写真（図3・4）を指して〕この人たちは〔4・3事件の時に〕虐殺された人たちです。学生の時、日帝時代だから、みんなこんな具合です。



図3 申燦鎬（左）

——軍服、全員。

李：はい。〔申燦鎬は〕京城の中学校を出て、済州島に帰ってきて面の職員だった時には、結婚してから。28歳で死にましたが。

あの、解放される前に、〔焼失を避けようと申燦鎬は〕戸籍を持って、爆撃に合い、家が全部ベチャンコになってふたりで逃げたのが、<sup>タンモル</sup> 닥모루 <sup>オルム</sup> [오름]\*<sup>1</sup> <sup>タンモル</sup> 닥모루を知っていますか？  
翰林面 <sup>ボンナンパツ</sup> 곽당밭 <sup>トンネ</sup> 동네 [「ネムの木のある村」の



図4 申燦鎬（右端）

意〕での爆撃にあって\*<sup>2</sup>。〔1945年〕3月になって米帝が爆破してしまったから。逃げて

飛揚島<sup>ビヤンド</sup>の前に隠れていたけれど、米帝が爆撃して50名が死に、死体がうちの家の前[の海]にみんな浮いていました。昔は、お婆さんたちは下着なんて着ない。でも、私ら逃げる時には、布団ひとつを持って。翰林面だけが爆破されたでしょ。倉庫があるから、火薬倉庫。



図5 金ビョンムン  
(李性好の姉の夫)



図6 大池橋に住んでいた時の友人たちと

——死んだ人の中に朝鮮人もいましたか？

李：朝鮮人はたくさん死にました。そのの埋立てというのは海のすぐ前なんでね。倉庫、火薬倉庫がそこにあるから、そこを爆破してしまったから、およそ50名は死んだでしょ。普通の、罪のない人たち。それが3月だけど、45年3月だけど、8月15日に解放されたから、[避難していた]山[タンモルオルム]から戸籍を持って降りてきて、これからは若い人たちが国を建て直そうと言って闘ったのに、30万のうち罪のない7万の人たちみんな殺してしまったじゃないですか[4・3事件の民衆虐殺を指す]。

[別の写真(図5)を指して]これはうちの姉<sup>ヒョンブ</sup>の夫。日帝時代から闘争した人はこの人しかいないな。[別の写真(図6・7)を指して]この人たちは全員、昔の[大阪の]大池橋に住んでいた時の友だちです<sup>2)</sup>。[別の写真(図8)を指して]



図7 大池橋に住んでいた時の友人たちと



図8 申燦鎬(右手前、当時小学校6年)と長兄・申チャンヒ(後列左端)(1937年3月)

2) この記録ではあまり話題に出てこないが、李性好さんは戦前、和歌山・尼崎の紡績工場で女工として働いていたことがある。

これが私の結婚した人、小学校6年の時、幼いころ。私よりひとつ下だったんです。私がいつも連れて歩いて、私は男の子みたいに遊んだの。いつも一緒にいながら、この子が一番好きだから、楽しい遊びはふたりだけで遊んで。そうするうちに結婚することになったの。私がしようと言ったんじゃないよ、両親が。

そのお父さんが帝国時代〔日本の植民地統治時代〕の前の翰林〔面〕の会計員をして、〔解放前に夜学をしていた〕その兄も〔解放後に〕会計員をして済州市税務署に行って。〔麗順事件の時〕済州市職員たち全員船に乗せて投げ捨てた時<sup>\*3</sup>があるでしょ？ はい、〔第11連隊の中に知り合いがひとりいたので〕その時どうにか生き残って、北へ行こうと仁川<sup>インチョン</sup>へ向かったものの行けずに風邪で死んだ、長兄は。中〔2番目〕の兄は満洲に逃げて、解放になったから戻ってきたのです。〔別の写真（図9）を指して〕この人が〔夫の〕中の兄。

〔別の写真（図10）を指して〕こちらが舅<sup>シアボジ</sup>。大林<sup>テリム</sup>〔里〕ではその時代に歌を聞かせるところ〔みんなで集まって歌を歌えるところ〕は、この家〔夫の家〕しかなかったの。大林で、うちが慶州<sup>キョンジュ</sup>李氏<sup>イ</sup>だから、うちの家が中より上です。金持ちでちょっとは知られた家で。この家〔夫の家〕も金持ちで学者の家だったの。うちの父が3代続けての一人息子だから、媽媽大王〔「媽媽」は王や王妃など高貴な人物につける尊称〕のように、それは大事に育てられたので仕事もできないんです。人の保証〔人〕に立ったようで、自分の財産……。

——全部なくしてしまったんですね。

李：翰林面大林，大林の人たちは学者が多いです。なぜかという、洙源<sup>スウォン</sup>と大林が上下の村です。中間に大きな石がありました。大きな石を上掘り起こすのか、下へ降ろすのかによって洙源と大林に分けます。

昔、李在守<sup>イジェス</sup>の乱<sup>（10）-（11）</sup>があった時にこんな話がありました。大林の人たちは力持ちだから、〔洙源の人たちは〕大きな石を降ろすのはできるけれど、引き上げるのは難しい。



図9 申燦鎬の次兄・申燦翊（左）

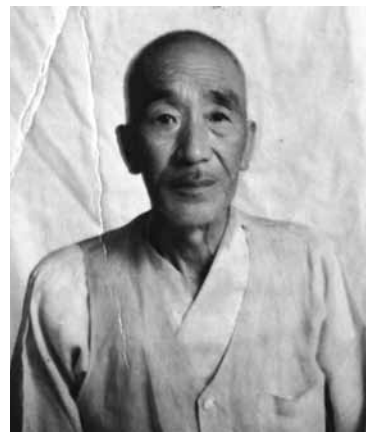


図10 申燦鎬の父・申ジェグン

大林の人たちは引き上げるから、大林を称賛の目で見入るのです。そして学者たちも多くいました。梁公八、<sup>ヤンコンバル</sup>梁致三、<sup>ヤンチサム</sup>金斗錫、<sup>キムトゥソク</sup>申燦翊、<sup>パク</sup>朴チヌ。洙源里よりも大林の人たちに知識人が多くて、社会主義の役目をする人が多かったのです。

〔済州公立農業学校<sup>(④-＊10)</sup>の〕日本の校長が差別をするから、梁公八、梁致三、申燦翊、この人たちがボクシングで〔鉄拳で〕校長と喧嘩して<sup>\*4</sup>。初めてだから退学になった。退学になって、森の中にも隠れたとか何とか、隠れるところがないから満洲に逃げたんですよ。

——退学だったら、済農〔済州公立農業学校〕から退学処分を受けたんですか？

李：ええ。その時は国が侵略されて、どうやって暮らすか皆目見当もつかない時期。ただ食いつなぐことしか考えられない時。〔申燦翊が〕日本に、解放前は〔来ました〕。だから、今はビデオを見ながら昔の歴史を知ったけれど、多くの同胞が満洲に逃げ暮らして、解放されてから帰ってきた人たちが多いじゃないですか？ その時日本に来ました、この方〔申燦翊〕は。

この方は日本に来て、食事は、その人たち〔大池橋の友人たち（図6・7）〕と、下宿していた時だから、食事は私が、おかずをこしらえる時は旅館を借りて。その時はどのような話をしたかという、日本陣営が負けてきたから、日本陣営が負ける前にみんなあっちに引っ張って行かれるから、引っ張って行かれる前にみんな早く発とうと。それで私はその時に、いち早く、済州島に一目散で行ってしまったんだ。労務者として行くのを避けるために。

——それは何年のことですか？ 44年？

李：それは44年？ 43年。ええと、43年には大池橋に住んでいた。今は大池橋のどこかも分からないから、みんな離れ離れになった。

## 解放、そして 4・3

### 《物資を求めて日本へ密航》

李：私らは46年10月、南労党〔南朝鮮労働党〕<sup>\*5</sup>が結成されたから、南労党にみな入れと言って。私らは南労党の党員なんです。

46年2月に〔47年2月の済州島民主主義民族戦線（民戦）<sup>\*6</sup>結成大会か？〕私が済

州代表で選出されました。光州，全羅南道で全国党結成大会する時<sup>3)</sup>。その時は朴憲永<sup>パクホンヨン</sup>が責任者，女性は劉英俊<sup>ユ・ヨンジュン</sup>\*<sup>7</sup> 女史，ソウルの。

——何名参加しましたか？

李：その時，済州島からは9名，代議員として。その時，翰林からは私と民青〔朝鮮民主青年同盟<sup>(10)\*8</sup>の代表〕。人民委員会<sup>\*8</sup>をやりながら，民青が主だったから。翰林面の組織委員長の任元全<sup>イムウォンジョン</sup>\*<sup>9</sup>氏とって，私と同じ歳の母方の親戚筋なんです，その人も済農出身。その大事な息子です。みんな死んでしまいました。〔その後，私は〕4・3事件で逃げてきたから，48年7月に。

〔それまで〕山にだけ，いたんです。パルチザンの役割ですね。山の中で練習，ちょうど4・3事件で，垣根をひょいっと飛び越える練習。西北青年団<sup>(8)\*3</sup>が入ってきて済州島が瀕死状態。麗順事件<sup>\*10</sup>の後に西北青年団が入ってきたから。だから47年，48年2・7闘争<sup>\*11</sup>の後には山に入って潜んでいました。部落に下りて行く時にその村の人のように〔振る舞って〕警戒しながら，米ももらって。生活に必要なものは，全部女性たちが調達したんです。女性組織と男性組織とはアジトが違います。その間。

2・7 闘争が初の武装闘争だから。48年2月7日，烽火を上げて武装闘争を開始し，総司令官が金達三<sup>キムダルサム</sup><sup>(6)\*11</sup>でした。この人は，1カ月間あっちに行ったりこっちに來たりしたでしょ。解放されて，どうやって国を建てようかと面の末端組織を構成して，30名が根こそぎ逮捕されて。日帝にあぐらをかいていた人，米帝にこびへつらった人，この人たちは韓独党〔韓国独立党〕<sup>\*12</sup>といいます。反動。

全員47年に逮捕されたから，落ち着くひまもないでしょ。〔翰林面人民委員会の細胞だった〕うちの夫は，跪いたから助かったって言います。釈放される時。今でこそ，5000ウォンなら，今の50万ウォン以上でしょう。罰金を納めて出てきたから，職場もクビになったから，私とふたりビラを作って夜12時ごろに，私が準備したビラを主人がタタッと全部貼るんです。村を全部回りながら。

48年7月には米ソ両軍が全部撤収するという〔モスクワ〕三相会議<sup>\*13</sup>の決定にも拘わらず，ソ連軍は全部北朝鮮から撤収。〔国家が〕自分たちの足で歩ける，そういうことですよ。南朝鮮では〔アメリカは〕撤軍せずにそのまま残り，政権を握って李承晩<sup>イ・スンマン</sup>を

3) 『済州新報』1947年2月26日付記事「各種社会団体参加で“民戦”盛大裏結成」によれば，同年2月23日の済州島民主主義民族戦線（民戦）結成大会で，「光州市南労党結成大会」にメッセージを送ることが提案・可決されている。李性好さんはこのメッセージを伝える代表のひとりに選ばれたものと考えられる。



使い、手あたり次第銃殺しろと、そんな状態だから自分の家で暮らせる道理がない。だから47年から〔撤収が〕始まったのが、48年7月になってソ連〔軍〕は〔北朝鮮地域から〕出て行きました。米軍は長期駐屯の態勢だから、私たちの生活を保証させるために、〔武装隊から〕誰か日本に行かないといけないとなって。私が日本に住んでいたからと、知っている人を探して、私たちの必要な物を調達して来いということでした。必要な物は、履物、運動靴、雨具も必要ですね。

——誰が指示したんですか？

李：人民委員会責任者が山のアジトで生活しながら、そこで討論して、米帝が長期戦をする憂慮があるから、われわれも長期戦に対備するためには生活必需品を準備しなければならないと、私に白羽の矢が立ったんです。指示だから、その時私が26歳でしょ。27歳かな。日本語は書けないけど分かるし。どこに行っても知り合いがいるからって選ばれたんでしょう。行くならヤミ船〔密航船〕じゃなかったらだめでしょ。小さな船。翰林面<sup>オンボ</sup>瓮浦からヤミ商売の船、瓮浦区長〔里長〕を通じて。助けてくれる人たちは部落にたくさんいるじゃないですか？ 何とか国を建てようというのに助けてくれる人たち。秘密裏に私が日本に行けるよう、船を用意してくれないかと頼んで。

48年7月に日本に来たのだけれど、福岡で降りたら、どこがどこだか分からない。その時、言葉を知らない中学生の子どもをひとり連れてきていたんですが、ようやくきちんとした格好で大阪に来たら、うちの兄が、貧しく暮らしていても、あちこち調べて連れて行ってくれたのだけれど、人民委員会で翰林面委員長をしていた金行敦<sup>キムヘンドン</sup>\*14という人がいました。

——金行敦？

李：委員長をやっていた人。捕まれば銃殺だから、日本に逃げてしまった。その当時。

それで、私の家でも〔日本に〕逃げようかと考えましたが、私の考えでは、〔夫を先に行かせた場合〕夫に女性ができて再婚でもしてしまったらだめじゃない。だから日本に行く時は一緒に行こうと言って。〔しかし夫は〕行かないということになった。総務部にいたので。山で総務の役割をしたの。総務だったら生活するあらゆる物、食べ物、全部責任を負わないといけない。

——じゃあ、初めて〔日本へ〕密航で来られた時はどこに？

李：初めて密航で来た時は、翰林面瓮浦から、尹<sup>ユン</sup>なんとかという〔人の〕ヤミ船がしょっちゅう往来する船がありました。そのヤミ市場をする人たち。日本から商品を持って済

州島に行って売ったりする商売人を乗せて往来する船がありました。その船を、瓮浦区長が船長をしました。

——船長を？

李：当時、コレラが済州島、全国〔全島〕に、ここからあちらの木までの距離を越えられなくなった〔移動することが困難な〕時に私たちもいたんです。当時、ヤミ市場を開く人たちですが、翰林から瓮浦に行こうとしても行けない時です。そんな時に人を通じて私が日本に来ることになったのは、さっき、どうしてかと言うと、米帝が駐屯して長期戦になるという方針で、どうにかして私たちがこれからの道を研究しなければだめだというのが、日本に来た理由よ。

#### 《1948年9月：済州島帰還、警察への連行と拷問》

李：ところが〔翰林面事務所の〕戸籍係の人の下で働いていた金ソッキという人が日本に来たという。いろいろと準備していたら9月になって、朝鮮から通知が来ていて。「今、愛国者たち〔を〕みんな銃殺しているから捕まったら死んでしまう、帰ってくるな」と。日本から帰らないとなると「自分ひとりここで生きて何になる」と言って。

梁センギル氏という人がいます。〔済州島へ戻る〕ヤミ船に乗ったのに、船が故障して風の吹くままに流されてしまい、着いたのが大静面。大静のどの村に下りたのか。〔日本では〕私が秘密裏に金スンリムや〔金〕行敦、李ビョンホ、この人たちに言って「愛国事業に、必要な物を注文することができるか。何が必要か。これがあればいい。武器」。〔彼らは〕武器を探してきてくれました。

捕まったら殺されてしまうから。〔大静に着いた後〕捕まった時に、一緒に行った人が、ヤミ船で一緒に行った人が30名いるけれど、「日本で何をしてきたのか？」〔と聞かれた〕。済州島に帰ったら、反動たちが毎日、家の前で歩哨を立てています。帰ってくる者はいないか、と。

暗号を知らない人は死ぬんです。暗号と言え、私たちも山ではいろいろあるけれど、私たちのは「これこれ、こんなことあるけれど見たことがあるか」というのが暗号です。使えない人は山に行けません。捕まったらアカと見做され、死ぬから。こんな生活をしていて、行って捕まるから。民保団<sup>⑦-＊7</sup> と言って、日帝に代わって李承晩の手先。

〔民保団に〕捕まって、ここで銃殺。質問をするから、〔ヤミ船に乗っていた〕30数名全員に、「日本で何をしてきたのか」と。「私は日本で生き延びられる準備しに行って

きた」。みんなもっともなことを言うんです。みんな捕まってしまうから。

私には何を聞いたかというと、「あなたは何しに日本に行ったのか?」。「私はここから7歳で日本に行って解放前に戻ったのですが、荷物を、生活をソウルに移しなさいというから母に頼まれて来た者です」[と答えた]。でも、同じ村からきた民保団の人[知り合いの梁某氏]がひとりいる。[私が彼に]「あ、ヒョンソクじゃないの?」[と声をかけておいて]「私は7歳の時に日本に行ったので誰も知りません」と弁明したので、それで[私は]生き残った。

それで、[民保団に捕まった人たちは]済農、済農に行く前にコンクリートの部屋で10泊ほどしたでしょ。済州市に行ったけれど、済農に行って生活しながら朝夕の食事時に、「誰だれ出て来い」と名前を呼ばれて行くと戻って来ないんです。私の知ってる人もいたけれど、帰って来ない。どうして帰って来ないんだろう? 名前を呼ばれて帰って来なければ、死んだんだと言います。髪をつかまれて行く人、大変でした。そのまま連れて行かれれば、そのまま死にました。

バスじゃないんです、トラックみたいなもの。その車に乗って帰って来たら、中山[間]村<sup>\*15</sup>は全部焼き払われていた。全部焼き払って、下りてこない人たちに、下りてきたら助けてやる、山にいる人は下りてきたら助けてやるというから下りてきたら、<sup>チョントゥル</sup>정투르飛行場<sup>\*16</sup>に大きな穴を掘っているのです、近くにいる人たちはどうしてあんなに大きな穴を掘るんだろう、また戦争が起こったのか、と思っていたら、27台のトラックを、山から下りて来いと言って帰順した人たちを、一口の食事も水も与えずに、一週間飢えさせて、騒げないように。飢えたら騒げないでしょ、力尽きて。そうして27台のトラック[分の人間]を穴に埋め、火薬を点けて殺した日が陰暦の8月11日<sup>4)</sup>です。日にちも忘れません。みんな死んでしまったから。その時から寺とか何とか、信じません。鬼神がいたら悪い奴らをみな、やって来て殺すだろうって、そうじゃないから一切宗教はごめんです。死んだら終わりです。私が生き延びて故郷に行くことになったから。

[自分は嫌疑を免れ、済州農業学校へ連れて行かれる]車から降りたから。私は翰林に住んでいたから、住んでいた翰林に行くというのに「翰林は絶対だめです」[という人がいる]。「じゃあどこへ行くの?」。雨がザーザー降っているのに。中山間村を全部焼き払って。見ると、イム氏が知っていた人<sup>ドンム</sup>なののですが、「私は北から下りてきて、反

4) 陰暦8月11日は、1948年であれば陽暦で9月13日であるが、この時期に飛行場での大規模な虐殺は確認できない。1949年であれば、陰暦8月11日は陽暦で10月2日となり、虐殺事件の日付と一致する。したがって李性好さんが伝え聞いたのは、49年の軍法会議による虐殺のことであろうと推測される。

対に今は民保団の責任者をしているから、絶対に家に帰ったらだめです」[と言う]。

[そこで、身を置く場として] 嫁ぎ先の伯母<sup>ヨモ</sup>がいい暮らしをしていたんです。申燦鎬の伯母が。財産を半分分けてくれて、財産はいい。大きな瓦屋根の家を建てて暮らしていました、洙源で。大林では瓦屋根の家がない、全部藁葺きの家。その瓦屋根の家に行っ  
て助けてくれと言ったんです。

「この人[李性好さん]を助けようと思ったら、どうしたらいいだろう」。その伯母は私のことをとても大切にしてくれるんです。[甥の妻なのに] 自分の姪<sup>チヨカ</sup>以上に。瓦屋根の家だから、家も大きい。「板の間に隠れていなさい」。また、板の間も調査する可能性があります、民保団で。それを避ける時には、かまどの焚口に入って隠れたりして。

そうやって3カ月過ごしたら49年になって。49年になったら李承晩の指示として、無条件の銃殺は中止せよと。[そこで] 朴某<sup>パク</sup>が私をうちの家<sup>ウチノイ</sup>に連れて行ったんです。そしたら母たちも「私が」みな死んでしまったとばかり思っていたら。誰にも分からないように、夜中に連れ出し何とか匿って、少し時が過ぎるまでそこにいようと言って。

うちの家にはかなり大きな甕<sup>ツツ</sup>があつて。穀物納屋の大きな甕の中に入って、そこで過ごしたんです。そこにいて、人がみな働きに出払った時は戸を閉めて、うちの父が相当お酒の好きな人だったんですが、私を守ろうとお酒も飲まずに。うち家に入ってくる路地がとても長いでしょ。敷地が広いから。入り口の路地の木の下でじっと座って煙草を吸いながら、少しでもおかしい人が来れば、知らせてくれるんです。

私の家の裏には竹林があつて、ミョウガやセリがたくさん生えていました。その時代が異常なのか、鼠がとてもたくさん出てきてミョウガを食べ尽くすのを目の当たりにして。鳥たちはざわざわしていて。それを見ながら考えたのは「ああ、あんな動物もしゃべれないだけで、われわれ人間と同じように、みな欲があるんだな」というようなこと。

## 《再度の連行》

李：そうやってどうにか過ごそうとして。うちの母の叔父<sup>チヤグンアギジ</sup>「一番下の弟」が翰林面の面長<sup>イム</sup>でした。任昌鉉<sup>イムチャンヒョン</sup>。長男は任サングク、次男は私の夫と同じ、面事務所<sup>イム</sup>で会計をしていたのに、みな立ち上がり、暴動が起こって武装闘争するから。面長の、そのお祖父さん、その息子、それからサングクの息子、その三父子を銃殺してしまったの<sup>5)</sup>。山から下り

5) 任昌鉉の娘の証言によれば、武装隊に襲われたのは任昌鉉のほか、長男ではなく次男の任保国とその息子で、事件は1948年5月14日のことであった（『済民日報』四・三取材班〔金重明訳〕『済州島四・三事件』第3巻〈流血惨事への前哨戦〉新幹社、2004年、31～32頁）。

てきて。

私を捕まえるために、うちの母の叔父〔母の父のすぐ下の弟〕の息子が反動のうちでもかなりの反動でした<sup>6)</sup>。私を探そうと必死だったの。もしかして私がどこかに隠れているんじゃないかと言って。私が裏で隠れている時に塀の上に登って見た。そうしたら、西北青年と金刑事と5人で。うちの家へ通じる路地に大きな柿の木があるんだけど、その実の陰にスーッと入って隠れていた。母がどこかに行って来て、「変な人が来た。裏に逃げろ!」。「裏に逃げたら捕まります。だめです」。私は門を開け「何かあったんですか?」と尋ねたの。そしたら「李性好という人がいますか?」「私が李性好です」「用事がある、来い!」。

それで〔私を〕連れて行ったのを、康錫柱<sup>カンソクチュ</sup>という、うちの夫の下で働いていた人が〔警察〕支署に入っていくって、その内部事情を見ながら解決して、一緒に帰って来ました。道中、何を話したかという、イム・ムギル<sup>イムムギル</sup>といって投書が来たのだけれど、李性好が日本から帰って来て、山に30万ウォンのお金を上納していたという投書が来たそう。投書が来たんだから、おしまいでしょ。康錫柱氏が、〔警察が〕私を殺そうとするのを助けようとした。西北青年たちが連れていくのを、〔康錫柱は〕「この人は私が責任を持つ」といって連れて行った。行く道で大きくへこんだ畑に向かいながら、「こんな投書が来て、これこれ、こんな事実があるから、それを分かった上で任せるから、あなたが考えてお使いなさい〔情報は伝えたから、どうするかはあなたが決断しなさい〕」。そうやって事実を話してくれたから。捕まったけれど、長い、こんな机があるのだけれど、そこで寝て監房には入れなかった。この人〔康錫柱〕は私が責任をとると言って。

でも今度は二日後に慕瑟浦<sup>モスルポ</sup>へ。本庁が慕瑟浦だから、本庁に押送されることになるんです。7人押送されたのですがね。本庁に押送される時はどのようにするかと言うと、私は日本から来て、全く日の当たらないところで過ごすから〔色が白くて〕、若い時だから、おそらく陸地の人たちが私を見る時は、どこかの貴婦人のように見ていたようです。服装もきちんとしていたから。昔、私たちはよその人に会う時、裸足で会うことはなかったんです。服装もきちんと整えてから会う。だから、そんな風にきちんと整った格好で行ったから。

その時、西北〔青年団〕から入ってきた人が慕瑟浦の責任者、課長と言っていました。名前は何か知りませんが。とても丁重な人でした。私が尋ねたんです。「あなたたちはなぜ捕まえに来たのですか?」[と言い、さらに]「あなたたちが帰順しろと言ったので

6)「烈<sup>セツ</sup>」は兄弟などの二番目をあらわす接頭辞。つまり、李性好さんの母方の祖父が長男、「母のセツタボジ」が次男、「母のチャグンアボジ」である任昌鉉が三男だったということであろう。

帰順したので、挨拶でもしようということか」と[尋ねました]。そう言うとき[その責任者は]「帰順して下りてきて支署に挨拶をしなかったから捕まえてきたのだ」と言うのです。ああ、それ[その言葉]は大変参考になりました。「ああ、そうですか」と。

それで、その課長が「あなたは何をしましたか？ あなたは何をしたのですか？」と言っても答えられません。みな「田舎者」<sup>チョンサラム</sup>たちだから[このような状況に慣れておらず、うまく答えることが]できないんです。私が「帰順しろと言うから帰順したのに、[警察]支署に挨拶しなかったと連れて来られたようです」[このように]私が言うと、「そう？ 本当ですか？」「ええ、そうです」「みんな帰れ」。そのまま釈放されました。「あなたはどんな、何に？」「あ、私は暴徒たちの活動に反対したから、暴徒たちはみな捕まったから、私は故郷に帰って来ました。ずっと[ここで]暮らそうと、私は故郷に帰って来ました」と言うとき、「ああ、そうなんですか、だったらいいでしょう」。山にいる人々を捕まえて来たら、みな逃がしてやると言っていた。何、かなりの人たちです。捕まえて来た人たち。

その帰順した人たちと、聞いた話が参考になりましたよ。支署に行ったでしょ。その時は軍人の車で。慕瑟浦から翰林まで軍人の車に乗せてくれたから、5時になってバスがないから。支署に戻ると、今度はそこの責任者たちが「あなたはどうやって出てきたんだ？」「私にどんな罪があったんですか？」。私を捉まえて離さないから、「私は暴徒が嫌いで日本に行って帰ってきた人だ。どうして私が出て来られない道理がありますか？ 私はあなたたちに、無事に出てきたと、有り難うと、挨拶をしようと帰ってきた」と。[警察官は]返す言葉もないでしょう。自分たちだけが私を仕掛けたんだから。「珍しい女性もいるもんだ」。取り調べの最中に何を言われたかというとき、「済州島にあなたのような女性が3人でもいたら、私たちはみな生きて帰れない」と言われましたね。

(以下、下篇)

\* 本研究は科学研究費補助金（課題番号 24530639）の助成を受けたものである。

## 【用語解説】

### \* 1 <sup>タンモル モ ル</sup> 닥모루 (오름)

済州市翰林面楮旨里に位置する<sup>オ름</sup>오름（寄生火山）。楮旨岳とも呼ばれる。標高 239.3 メートルのなだらかな円形の山である。また楮旨里の集落自体も「タンモル」とよばれていた。

## \* 2 翰林への米軍空襲

たとえば1945年7月、翰林港の地雷倉庫が米軍によって爆撃され、民家被害400戸、死亡者30余名、負傷者200余名が発生したとされる（『제주의 마을시리즈 10 한림리 [済州のマウルシリーズ10 翰林里]』図書出版<sup>판석</sup><sup>판석</sup>, 1989年）。ほかにも、艦船が爆撃されたり、機雷により爆破される事件がこの地域では頻発していた。翰林港は済州島の主要港のひとつであり、また同年4月以降に日本軍が米軍の攻撃に備え、陣地構築を進めたことが背景となっている。ただ、すべての空襲が記録されているとは言えず、李性好さんの言う3月の空襲の規模などを他の資料から確認することは難しい。

## \* 3 水葬

済州島4・3事件当時の討伐隊による虐殺方法のひとつで、船で沖に出た後、検挙者に石を縛りつけて海に突き落とししたり、船上で銃殺してそのまま海に投げ捨てるなどのやり方が取られた。とくに1948年11月からの焦土化作戦期や、朝鮮戦争勃発直後の予備検束の時期に多く行われた。

水葬はほとんど正式な裁判を経ることなく実施され、殺害の理由も分かりにくい。また死亡日がはっきりせず死体も見つかりにくいなど、遺族にとって苦痛が大きい。李性好さんのいう「市職員の水葬」もはっきりと事件を同定するのは難しいが、済民日報四・三取材班は水葬の事例を紹介しつつ、1948年11月に当時の済州邑で行われた大虐殺の犠牲者には財物を扱っていた官吏が多かった、と指摘している（「済民日報」四・三取材班（金重明・文純實訳）『済州島四・三事件』第4巻〈焦土化作戦（上）〉新幹社、1998年、158頁）。

## \* 4 済州公立農学校での乱闘事件

1931年3月9日、ある学生が落第させられ卒業不能になったことをきっかけに、校内での学生と教員間の乱闘事件と、学生による校長自宅への抗議行動が起こった。申燦翊は前者の事件で検挙、起訴され、大邱覆審法院で懲役1年（執行猶予5年）の判決が下された。本文中に出てくる大林里出身の梁公八、梁致三、金斗錫はいずれも当時、済州農業学校に在学中でこの抗議行動に参加しており、梁公八は懲役10月（執行猶予5年）、梁致三は懲役1年6月（執行猶予5年）、金斗錫は罰金50円と留置50日に処せられた。これらの事件の背景には、1929年の光州学生運動に代表される、学生による独立運動の高潮があった。

## \* 5 南朝鮮労働党（再掲）

南朝鮮労働党（南労党）は、1946年11月23日、共産党、新民党、および人民党の一

部が合党して結成された社会主義政党。果敢な反米抗争、パルチザン闘争を展開したが、米軍政の弾圧で主要な幹部は北に逃れた。朝鮮民主主義人民共和国成立後の1949年6月に北朝鮮労働党と合同して朝鮮労働党となり、南労党最高指導者の朴憲永は副委員長に就任した（委員長は金日成）。

## \* 6 民主主義民族戦線（民戦）

「民主主義民族戦線」は、1946年2月15日にソウルで、朝鮮共産党、人民党（呂運亨系）、新民党（延安派系）などの左派政党、全評（朝鮮労働組合全国評議会）、朝鮮民主青年総同盟、朝鮮婦女総同盟などの大衆団体によって結成された統一戦線組織であり、在日本朝鮮人聯盟（朝聯）も参加していた。米軍政によって否定された建国準備委員会と朝鮮人民共和国の流れを汲む、左派・中道勢力の結集体で、人民共和国に対する米軍政の解散命令、保守派による「南朝鮮大韓国民代表民主議院」結成などの情勢に対応するものであった。

民戦は信託統治実施後の朝鮮独立を定めたモスクワ協定を支持する運動を展開したが、やがて朝鮮共産党が米軍政との対決路線に傾斜すると、その活動は萎縮し、49年9月に北朝鮮民戦（民主主義民族統一戦線）と統合して、祖国統一民主主義戦線へと解消した。

済州島においては民戦の組織は1年ほど遅れ、47年2月23日に「済州島民主主義民族戦線」が結成された。結成大会では、朴景勲道知事が祝辞を述べるなど、この時点では済州島民から広く支持を受けていた。

## \* 7 劉英俊<sup>ユ・ヨンジュン</sup>

医師、女性運動家。1890年平壤生まれ。東京女子医学専門学校に通いながら社会主義運動に参加するようになる。1927年、権友会結成に参加し中央執行委員となる。1945年8月建国婦女総同盟委員長、同年12月朝鮮婦女総同盟委員長、1946年2月の民主主義民族戦線結成と同年11月の南朝鮮労働党結成ではいずれも副議長団に加わっている。1948年7月、南北諸政党社会団体連席会議（第2次南北連席会議）に出席した後、平壤にとどまる。1957年には朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議の代議員に選ばれている。

## \* 8 人民委員会（再掲、一部修正）

1945年8月15日、日本の敗戦にともない、事実上、朝鮮の行政と治安を担う機関として朝鮮建国準備委員会（以下、建準）が組織され、全国各地に145の支部がつくられた。9月6日に、朝鮮人民共和国の樹立が宣言され、建準の中央本部・各地方支部は人民委員会に再編成されて、朝鮮民衆による地方自治機関の役割を果たした。しかし9月8日に南



朝鮮に進駐してきたアメリカ軍は、人民委員会を左翼組織と決めつけ、やがて全面的に弾圧するに至った。

済州島では45年9月10日に建準支部が創設され、同月23日に済州島人民委員会へと改編された。植民地期の民族解放運動勢力を中核とする済州島人民委員会は、強力な自治機関として民衆の圧倒的的支持を受けており、また他地域と違って、48年初めの時点までは、米軍政との間に直接衝突することもなかった。

## イムウォンジョン \* 9 任元全

任元全は前出の申燦鎬らとともに、翰林面では著名な人物であった。武装隊に参加した「入山者」であったが、現在でも大林里の人びとにはよい印象を残しており、「みな頭が良かったが決して傲慢でなく、人格を備えた人たちでした」（『済民日報』四・三取材班〔金蒼生訳〕『済州島四・三事件』第6巻〈焦土化作戦（下）〉新幹社、2004年、95頁）と言われている。

## \* 10 麗順事件（麗水・順天事件、再掲）

4・3事件鎮圧のため、済州島への出動を命じられた麗水の国防警備隊第14連隊は、1948年10月19日、出動命令を拒んで反乱を起こし、翌20日には隣接する順天にも反乱が波及、麗水・順天を解放区として人民委員会を再建した。当時、韓国軍内には南朝鮮労働党（南労党）のフラクションが健在であり、第14連隊の将校クラスには南労党員もいた。反乱は10月28日に鎮圧されたが、都市部から撤収した反乱兵約1000人は智異山へ移動し、以後山岳地帯を根拠地として、南労党指揮下のパルチザン闘争が展開されることになった。

## \* 11 2・7救国闘争

1947年9月に朝鮮問題が国連に上程され、48年1月には国連臨時朝鮮委員会が南朝鮮に派遣されるなど、南朝鮮のみの単独選挙実施が近づく中、南労党は48年2月7日に「2・7救国闘争」と名付けた南朝鮮全土でのゼネストと実力行動を展開した。済州島でも2月9日から11日までの間、デモが展開されて民衆と警察が衝突し、大林里に近い楮旨警察支署ではデモ隊の投石でガラスが割られ、翌日20数名が逮捕された。済州島全域で、警察との衝突があった村では青年のほとんどが連行されたという。

## \* 12 韓国独立党（韓独党。再掲、一部加筆）

1930年（一説には1928年）、中国の上海で大韓民国臨時政府を支持するために安昌浩・

李東寧・趙素昂・金九らが結成した民族主義右派の政党。その後、左派勢力との協同戦線を模索するため、解散、再結成、再解散を経たのち、1940年5月に右派勢力を統合して三度結成され（「統合」韓国独立党）、大韓民国臨時政府において与党的役割を果たした。解放後は帰国した金九ら指導部を中心に、安在鴻らの国民党などを吸収して南朝鮮で信託統治<sup>①-＊13</sup> 反対運動（反託運動）を展開する一方、単独政府樹立に反対して南朝鮮単独選挙をボイコットし、北側の金日成・金料奉らと統一政府樹立方案を話し合う南北協商を推進した。しかし南北それぞれで政府が樹立され、1949年6月29日に金九が暗殺されると、急速に勢力が衰退した。

済州島では、安在鴻に近く韓独党農林部長であった柳海辰が、1947年4月15日に第2代道知事に就任していた。徹底した反共主義者である彼は、西北青年団員をともなって赴任し、3・1節発砲事件に抗議しゼネストに参加した官吏を罷免するなど、1948年の4・3蜂起と5・10単独選挙を経て同年5月28日に更迭されるまで、強硬姿勢で左派に臨んだ。米軍の記録には、「極右主義者である道知事は左翼に人気がなく、彼の暗殺を要求するビラが撒かれた」と記されている。

### ＊ 13 モスクワ三国外相会議

1945年12月、モスクワで英米ソの外相が会合、朝鮮問題をふくめ戦後処理問題について協議し、合意事項がモスクワ協定として発表された。朝鮮については、米ソ共同委員会の設置と米英中ソの4カ国による信託統治をへての独立政府樹立がその主な内容であった。この信託統治案について南朝鮮では「ソ連の提案により即時独立が阻まれた」と理解され、反対の世論が高まった。一方、米ソ両軍の撤退については、1947年9月に米ソ共同委員会が決裂し、アメリカが朝鮮問題を国連に上程したのに対して、ソ連によって米ソ両軍が1948年初めまでに同時に朝鮮から撤退することが提案されている。実際の撤退完了は、ソ連軍が48年12月末、米軍が49年6月29日であった。

### ＊ 14 <sup>キムヘンドン</sup>金行敦

洙源里出身。翰林面人民委員会書記局長および翰林面民青（民主青年同盟）委員長。父の金顕国は建国準備委員会翰林面委員長、弟の金翰錫とともに翰林地域の青年運動のリーダーであった。1930年代に日本で労働運動に参加し、獄中生活を送った。1948年10月30日、西北青年団が洙源里を包囲し、青年たちを拷問、銃殺したが、このとき生き残った人物は次のように回想している。「金行敦さんたちは青年たちから大きな尊敬を集めていました。彼らの影響によって誰もが建準と人民委員会に参加しました。青年や夫人たちの活動も活

発でした。ところが、これはそのまま銃殺劇の理由になりました。私を含め、その日の銃弾にやられた三名すべてが青年運動を熱心にした人たちでした」（『済民日報』四・三取材班〔金蒼生訳〕『済州島四・三事件』第6巻〈焦土化作戦（下）〉新幹社、2004年、97～98頁）。

#### \* 15 中山間村（再掲、一部修正）

火山島である済州島の山岳地帯と海岸地帯との中間に位置する地域（おおむね海拔200メートル以上）は中山間地帯と呼ばれ、1948年11月から軍・警察により「敵性地域」として集中的な焦土化作戦が展開された。住民は海岸地域に強制疎開させられ、残った住民は遊撃隊に与するものとして殺害されたという。作戦は翌49年春まで続き、多数の犠牲者を出すとともに、10数カ村が廃村となった。

#### \* 16 チョントフル 정뜨르飛行場

現在の済州国際空港にあたる。第二次大戦末期に日本軍によって建設され、解放後も現在まで飛行場として利用されつづけている。4・3事件の期間には集団虐殺と遺体隠蔽の現場となった。代表的なものとしては、1949年10月2日の軍法会議による死刑囚249名の銃殺と、朝鮮戦争勃発直後の予備検束者の虐殺がある。2007年より2011年まで2回にわたって遺体の発掘調査がおこなわれ、合計384体の遺体が発見された。遺品やDNA鑑定により身元が確認された遺体もある。発掘された遺体のほとんどは、火葬されたのち、現在は4・3平和公園内に安置されている。